

# 冷徹社長の溺愛契約

〽年下秘書は逃げられない〽

中編 試し読み

にやむ書房



## Chapter I 変化

出張から戻って数日。オフィスの空気はどこか引き締まっていた。ひなは颯のスケジュール帳を前に、深呼吸を繰り返した。完璧でなければ。完璧でなければ、許されない。そう思い込んでいた。

「お茶」

颯の声。ひなは反射的に立ち上がった。給湯室で急須にお湯を注ぐとき、窓ガラスに映る自分の顔を見て、はっとした。昨日より、少し顔の線が柔らかくなっているような。目の奥に、どこか期待のような光が宿っているような。

「失礼します」

ひなは社長室に入り、カップを颯のデスクに置く。その瞬間、颯がファイルから顔を上げ、ひなを見つめた。ただ、それだけのこと。でも、その視線は出張前とは明らかに違っていた。評価の眼差しの奥に、何か熱を帯びたものが宿っている。

「時間通りだ」

「はい」

席に戻ろうとした瞬間、颯が言った。

「待て」

ひなは立ち止まる。

「……何か」

「そのファイル、持ってこい」

颯が指差したのは、書庫の一番上の棚にある分厚いファイルだった。背伸びをして手を伸ばす。でも指先が、ぎりぎり届かない。

「……っ」

気配がした。颯がすぐ背後に立っていた。体温が、伝わってくる距離。かすかに香る彼のコロンに、ひなの胸が跳ねた。

「無駄だ」

颯はひなの腕をかすめるようにしてファイルを取った。一瞬の接触。でも、その熱は、しばらく肌に残った。

「……あ、ありがとうございます」

急いで社長室を出て、自分の席に戻る。胸が高鳴っている。火照った頬を、同僚たちに見られていないだろうか。

午後、呼び出された部長室で、思わぬ言葉をかけられた。

「橘さん、最近の神崎社長、どうですか」

「え、いつも通りです……」

「そうですか。でも、社長の機嫌が少し良くなった気がしてね。君が来てからですよ」

胸がどぎりとした。でも、そんなはずはない、とひなはすぐに打ち消した。

終業後も、ひなは残って仕事をしていた。颯の要求は尽きない。それでも、この時間が嫌いではなくなっていた。

「……まだか」

颯の声に、ひなはハツとして手元に視線を戻す。ふと顔を上げると、颯がこちらを見ていた。冷たい視線ではなく、どこか静かに、ひなの様子を確かめるような目だった。

「お茶、一杯」

「はい」

給湯室に向かうと、同僚の田中が話しかけてきた。

「橘さん、最近社長の雰囲気、ちょっと変わった気しない？なんか、前より……柔らかいっていうか」

「そう……ですか？」

「橘さんが専属になってからだよ、絶対」

笑いながら去っていく田中の背中を見て、ひなはお茶を持つ手を止めた。自分以外にも、見えているのか。

社長室に戻ると、颯は窓辺で夜景を眺めていた。

「遅い」

「申し訳ありません」

お茶をテーブルに置いた瞬間、颯が振り向いた。そして、ひなの顎を優しくつかみ、顔を近づけた。

「……誰のせいだ？」

息がかかる。熱い。ひなは目を閉じた。

「……私の、です」

「その通り」

颯はそう言うのと、唇を重ねた。柔らかく、そして確実に。ひなはその熱に全身を委ねた。いつもと違う。支配ではなく、愛おしさのような。そんな感触が、ひなの心を溶かしていく。



颯は唇を離すと、ひなの髪を優しく撫でた。

「帰れ」

「……はい」

ひなは何か言いたかったが、結局何も言わずに社長室を出た。扉の後ろで、胸が高鳴るのを感じた。変化。それが自分を、そして颯を変えている。

## Chapter II 接近

「昼食の準備を」

いつもなら、デスクで食べる弁当を買ってくるよう頼まれる。しかし、今日は違った。颯は立ち上がると、自分の上着を手にとった。

「外で食べる」

「はっ？」

「来い」

颯は先に社長室を出ていった。ひなは慌てて後を追った。社員食堂ではない。エレベーターで降りた先は、ホテルのラウンジのような店だった。颯は何も言わずにマネージャーと話し、窓際の、完全に仕切られたテーブルに案内された。

「注文しろ」

「あ、はい……」

メニューを開いたひなの手が止まった。高価すぎて、言葉が出ない。颯はそんなひなの様子を見ると、静かにウェ이터を呼び、自分で注文した。

「俺が決めた」

ウェ이터が去ると、静寂が降りた。オフィスとは違う空気。ひなはどうしていいかわからなかった。

「……なぜ、ここに？」

「聞きたいか」

ひなは黙った。聞きたい。でも、聞けない。

「田中を、異動させた」

「え……?」

「昨日、君に話しかけていた」

「それは……仕事の話で……」

「どちらでも同じだ」

それだけ言って、颯はグラスに口をつけた。ひなは言葉を失った。仕事上の理由なんてない。ただ、自分に話しかけたから。その事実が、ひなの胸に静かに落ちていった。

「……俺は、君が俺以外と話するのが嫌いだ」

低い声。感情を排した口調なのに、その言葉の重さが胸に刺さった。

「……わかりました」

小さく頷いた。その時、料理が運ばれてきた。颯は何も言わずに食べ始めた。ひなも黙ってフォークを動かす。でも料理の味が、全くわからない。

「……美味しいか？」

突然、颯が聞いた。

「え、はい、とても……」

「嘘だ」

「……」

「その顔、何も感じていない」

颯はそう言うと、自分の皿の料理をひなの皿に移し始めた。

「え、あ、神崎社長……」

「黙って食べろ」

「……はい」

おずおずと口に運ぶ。その瞬間、驚いた。味があった。温かい。どこか、優しい味だった。颯はそんなひなを、静かに見ていた。

「この話、外に出したら、わかるな？」

「……はい」

颯はワイングラスを口に運んだ。その横顔が、ひなの目に焼き付いた。仮面の下に、誰も知らない熱が隠されている。それを、自分だけが知っている。その秘密が、ひなの胸を密かに熱くした。

## Chapter III 嫉妬

取引先との打ち合わせ。相手の営業部長、山田は露骨にひなへの好意を示していた。

「橘さん、この資料、素晴らしいですね。誰よりも気が利く」

「お褒めいただきありがとうございます」

「今度、食事でもいかがですか？仕事の話ではなく、個人として」

「それは……」

ひなが言葉を選んでいると、颯が静かに口を開いた。

「山田さん、契約内容に不満があるなら、今ここで白紙に戻してもいい」

「い、いえ、決して！」

山田は慌てて話題を変えた。打ち合わせが終わり、山田が帰り際にひなのそばに寄ってきた。

「橘さん、先ほどは失礼しました。ですが、誘いの気持ちは本物で……」

「山田さん」

颯の声が低く割り込んだ。振り向くと、颯が書類を手にしたまま、こちらを見ていた。その目は、冷たかった。

「お車の手配をしました。どうぞ」

それだけ言って、颯は視線を外した。山田は何かを察したように、深く頭を下げ去っていった。

オフィスに静寂が戻る。颯はひなの隣に來ると、低い声で言った。

「来い」

社長室に入ると、颯は扉を閉めた。ひなに向き直り、その目が静かに燃えていた。



「……なぜ笑っていた」

「仕事ですから」

「仕事か」

颯はひなの顎を捉え、顔を近づけた。

「俺にだけ、笑え」

「……っ」

「君の笑顔は、俺にだけ向けろ」

ひなは言葉に詰まった。独占欲。それがこの男の本質だった。

「……わかりました」

颯はひなの手首を掴むと、静かに言った。

「行くぞ」

——二人が向かう先は、本編で。